

とし。さて白ちゝみはおりおろしたるまゝをさらす。余のちゝみは糸につくりたるを拐にかけてさらす。その拐とは細き丸竹を三四尺ほどの弓になして、その弦に糸をかけ拐ながら竿にかけわたしてさらす也。白ちゝみは平地の雪の上にもさらし、又高さ三尺あまり長さは布ほどになし、横幅は勝手にまかせ土手のやうに雪にてつくり、その上にちゝみをならべてさらしもする也。〔『校註北越雪譜』上之の巻、ルビ略〕

## 8. 比喩・慣用句

共通語の「雪」は①空気中の水蒸気が氷結して降ってくること、その積もったもの、②雪景色、③白髪、④白いもののたとえに用いられるが、当該方言のユキは①、②、④にのみ用いる。③はシラゲである。④が比喩用法となる。コノアカンボノハダワ ユキミターニ シーロイネー（この赤ちゃんの肌は雪みたいに白いねえ）。白い肌はユキハダ（雪くのように白い）

肌）と、複合語の形でもいう。雪の白さは慣用句にも使われ、ユキト スミホド チガウ（正反対に違う、月とスッポン）という。値段・品質・性格などの対比に用い、この表現には話者の評価が明確に加えられている。これに対し、たとえば値段の大きな違いについて、単に比べているに過ぎない場合には、バカ ジョーゲガ アルネー（ずいぶん差があるねえ）などという。この表現では評価を個々の対象にはくだしていないという差があるという。

冷たいもののたとえに単語のユキの使われることはないようで、固体の冷たさにはコーリ（氷）が、液体の冷たさには複合語ユキミズ（雪水）が使われ、コーリミターニ ハッコイ（氷みたいに冷たい）、ユキミズミターニ ハッコイ（雪水みたいに冷たい）のごとく表現される。

（城西大学女子短期大学部講師）

# 自他対応の不規則性

——「ぬける」「ぬく」「ぬかす」を例として——

福田 明子

## 1. はじめに

日本語には共通の語幹から分岐した動詞で、自動詞と他動詞という関係になっている例が多く見られる。自他の対応とは大ざっぱに言えば、ある一つのゴトを二つの動詞  $V_1$  と  $V_2$  により次のように二通りに表現でき、更に  $V_1$  と  $V_2$  が共通の語幹から分岐してできたものである場合の両者の関係を言う。

(1)  $NP_1$  ガ  $V_1$

(2)  $NP_1$  ガ  $NP_2$  ヲ  $V_2$

「ほける」「ほかす」は自他の対応をなすと考えられる。

(3) 事件の核心が ほける。

(4) 刑事が 事件の核心を ほかす。

ところが、奥津1967で指摘されているように、自他の対応は「単に動詞に限られる問題ではなく、それを含む文全体に関わりを持」っており、自他が対応していると思われる動詞でも、用例を一つ一つ見ていくと、それほど単純に(1)から(2)へ、(2)から(1)へと言い換えができるわけではない。

奥津1967では、この「ほける」「ほかす」について次

のような例を挙げている。

(5) この頃 頭が ほけてきた。

(6) \*この頃 頭を ほかしてきた。

(5)から(6)への言い換えはできない。次の例も同様である。

(7) 壁の色が ほける。

(8) \*彼が 壁の色を ほかす。

厳密には、(3)と(4)、(5)と(6)はいずれも自他が対応しているとは言えない。

本稿では自他の対応について、「ぬける」「ぬく」「ぬかす」を取り挙げて考察し、自他の対応を考える一助としたい。

このうち、「ぬかす」は形の上では単他動詞<sup>(a1)</sup>「ぬく」を他動化してできた複他動詞<sup>(a2)</sup>のようである。一般に、単他動詞と複他動詞の間には次のような格の交替が見られる。

(9)  $NP$ ガ  $NP$ ヲ  $V_t$  ( $V_t$ : 単他動詞)

(10)  $NP$ ガ  $NP$ ニ  $NP$ ヲ  $V_{dt}$  ( $V_{dt}$ : 複他動詞)

これに「ぬく」「ぬかす」をあてはめると。

(11) 太郎が 大事な部分を めく。

(12) \*次郎が 太郎に 大事な部分を めかす。

(11)(12)から「めかす」が単他動詞「めく」の複他動詞でないことがわかる。又、「めかす」は

(13) 太郎が 大事な部分を めかす。

(14) 太郎が 次郎を めかす。

のように単他動詞の構文をとることからも単他動詞であることがわかる。

なお、これらと同じ語幹から分岐される動詞には「めかる」もあるが、生産性が低いので特に取り挙げることはしない。

## 2. 分析の方法

本稿では自他の対応により「めける」「めく」「めかす」が作り出す文のタイプを大きく五つに分け、そのタイプごとにこれらの動詞と共に起する名詞句の表す意味的な格を考察する。五つの文のタイプのうち、

(15) 汽車が トンネルを めける。

(16) \*太郎が 汽車を トンネルを めく。

(17) \*太郎が 汽車を トンネルを めかす。

のように「めける」を用いた文だけが正しい文として成立するものをⅠ類とする。

これに対し、

(18) 髪の毛が めける。

(19) 太郎が 髪の毛を めく。

(20) \*太郎が 髪の毛を めかす。

のように「めける」「めく」を用いた文が成立して、自他の対応をなすものをⅡ類とする。

次に、

(21) \*次郎が めける。

(22) 太郎が 次郎を めく。

(23) 太郎が 次郎を めかす。

のように「めく」「めかす」を用いた文が成立するものをⅢ類とする。(21)は〈一方が他方を追い越す〉コトを示す(22)(23)とは別のコトを示しているので、他の例と対応していないと考える。

最後に

(24) 大事な部分が めける。

(25) 太郎が 大事な部分を めく。

(26) 太郎が 大事な部分を めかす。

のように「めける」「めく」「めかす」を用いた文がすべて成立して、自他の対応をなすものをⅣ類とする。

## 3. 「めける」「めく」「めかす」の分析

### 3.1. Ⅰ類（「めける」——「\*めく」「\*めかす」）場所か

らの離脱

まず、「めける」を用いた文のみが正しい文として成立する例を考察する。

(27) 太郎が 新京極の雑踏を めける。

これに対応する他動詞文を作ろうとしても非文になってしまう。

(28) \*次郎が 太郎を 新京極の雑踏を めく。

(29) \*次郎が 太郎を 新京極の雑踏を めかす。

(28)(29)は次のようにヲ格をカラ格に変えても成立しない。

(30) \*次郎が 太郎を 新京極の雑踏から めく。

(31) \*次郎が 太郎を 新京極の雑踏から めかす。

(30)(31)が非文になることから(28)(29)が非文となった要因はヲ格が連続して現れるためではないことがはっきりする。

(27)で挙げたようにⅠ類の「めける」は

(27) 太郎が 新京極の雑踏を めける。

(32) NP<sub>1</sub> ガ NP<sub>2</sub> ヲ めける。

という構文をとる。

ガ格には(27)で見たように「人間」をとる。「人間」は他からの働きかけを受けなくてもそれ自体が移動可能なものである。このようにそれ自体、移動できる名詞句の意味的な格は〔動作主／対象〕であると考えられる。(33)のようにガ格に「乗り物」もとれるのは、「乗り物」を「人間」と同じようにそれ自体、移動できるものとして促えているからであろう。

(33) 電車が トンネルを めける。

一方、ヲ格には〔動作主／対象〕が移動する〔場所〕をとる。

(33) 電車が トンネルを めける。

(34) 太郎が アーケード街を めける。

次の例文はこれまでに挙げた例文と同じパターンをとるが、ガ格、ヲ格のとり名詞句がこれまでの例文と異なる。

(35) 王監督が 巨人軍を めける。

ガ格には、巨人軍の一員である「王選手」など、ある集合に所属する「人間」をとる。

(36) A国が 同盟を めける。

のように「人間」と同じようにある集合に所属し、そこから離脱することも可能な「A国、東京都」などの「団体」もとれるが、いずれの場合もある集合の「成員」である。

一方、ヲ格には「巨人軍、同盟、グループ、日本リーグ」などの「集合」をとる。

この場合の「めける」は「成員」が「集合」に所属している状態から非所属の関係へと変化したことを示

す。〔場所〕を広義にとれば、「成員」が「集合」内から「集合」外へと移動したと見ることができる。そこで、

(36) A国が 同盟を ぬける。

のガ格ヲ格のとり名詞句の意味的な格は先に考察した(27)のガ格、ヲ格と同様に〔動作主／対象〕、〔場所〕であり、(36)は(27)と同じパターンであると考えられる。

(27) 太郎が 新京極の雑踏を ぬける。

例えば

(37) 太郎が 列を ぬける。

というのは、「太郎」が実際に並んでいる「列」から離脱するコトを示しているともとれるし、

(38) 太郎が A社の海外輸出戦略の列を ぬける。

というように、ある「集合」から離脱するコトを示しているともとれる。そういう意味では(37)は具体的な移動と抽象化された移動との境界線上にあると言える。

〔場所〕をマークするヲはカラに換えることができる。

(39) 王監督が 巨人軍を／から ぬける。

しかし、〔場所〕にとる名詞句によってはヲをカラに換えにくい。

(40) ?太郎が 路地から ぬける。

3.1.をまとめると、構文としては

(41) 〔動作主／対象〕ガ〔場所〕ヲ／カラぬける。

〔動作主／対象〕にはそれ自体、移動可能な「人間」や「乗り物」、ある「集合」の「成員」、〔場所〕には限界が想定できる「場所」をとる。それは空間的に位置を占める「場所」でもいいし、或は、「集合」のように抽象化された「場所」でもいい。

意味としては

(42) <〔動作主／対象〕がある〔場所〕から離脱する>

(49) 〔対象〕にとる名詞句

- ① 髪の毛、白髪、刺草、雑草、釘
- ② コンセント
- ③ コルク栓
- ④ 風呂桶の底

この名詞句の意味的な格は〔動作主〕の働きかけを受けるものであるので〔対象〕と考えられる。

今までの例文では〔対象〕がすべて固体であった。気体・液体の場合はどうか。

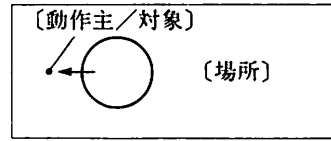
(50) タイヤの空気が ぬける。

(51) 太郎が タイヤの空気を ぬく。

(50)(51)は〔対象〕が気体の例である。

というコトを示しており、これを図示すると(43)のようになる。

(43)



3.2. II類(「ぬける」——「ぬく」「ぬかす」) 固定物の離脱

ここでは「ぬける」「ぬく」を用いた文が成立し、自他の対応をなす例を考察する。

(44) 髪の毛が ぬける。

(45) 太郎が 髪の毛を ぬく。

「ぬける」「ぬく」に対して、

(46)\* 太郎が 髪の毛を ぬかす。

は成立しない。

II類の「ぬける」「ぬく」はそれぞれ

(47) NP<sub>2</sub>ガ (NP<sub>3</sub>カラ) ぬける。

(48) NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ (NP<sub>3</sub>カラ) ぬく。

という構文をとる。

「ぬく」のガ格には人間をとる。このガ格がとる名詞句の意味的な格は対象への働きかけを行うという意味で〔動作主〕と考えられる。

一方、「ぬく」のヲ格、及び、「ぬける」のガ格には「髪の毛、白髪、刺、雑草、歯、釘、コンセント、コルク栓、風呂桶の底」などをとることができる。これはすべて(49)に図示するようにある〔場所〕に一部、或は全体がその〔場所〕に入り込む形で固定されているものである。

|                  | ぬける | ぬく | ぬかす |
|------------------|-----|----|-----|
| ① 髪の毛、白髪、刺草、雑草、釘 | +   | +  | -   |
| ② コンセント          | +   | +  | -   |
| ③ コルク栓           | +   | +  | -   |
| ④ 風呂桶の底          | +   | +  | -   |

(52) 風呂の水が ぬける。

(53) 太郎が 風呂の水を ぬく。

(52)(53)は〔対象〕が液体の例である。(50)~(53)からわかるように気体・液体の時も固体の時と同じパターンをとる。〔対象〕には「ヒールの気、におい、香り、力、毒気、気、風呂の水」などをとる。ただし、〔対象〕と〔場所〕との関係は固体の時とは異なり、〔対象〕の全

体が〔場所〕に入り込んでいる形で固定されている。

いずれの場合でも

(54) <〔対象〕がある〔場所〕から離脱する>

というコトを示している。

これまでの例文では〔場所〕を特に文中に示していないが、強いて示そうとすれば、

(55) 髪の毛が 頭から ぬける。

(56) 太郎が 髪の毛を頭から ぬく。

のように、カラ格で離脱の起点となる〔場所〕を示すことができる。本来、〔対象〕と〔場所〕とは一体のものであり、(55)(56)のようにカラを使って〔場所〕を示すのは特に起点を示したいからである。

(57) 子供「空気をぬいたよ」

親「えっ、どこの？」

子供「タイヤの空気だよ」

親「えっ！ タイヤから 空気を ぬいたって！」

(57)は親子の会話である。親はまず子供が何かの空気をぬいたことを知る。そして、その起点を特に問題とした最後の発話ではカラ格を用いたのである。このような状況ではカラ格を使う方が自然である。

(55)~(57)で考察してきたことをまとめると、

(58) { [A] / [B] が ぬける。  
[B] が [A] カラ ぬける。

(59) { [A] / [B] が ぬく。  
[B] が [A] カラ ぬく。

[B]は〔対象〕であり、[A]は[B]が固定されている〔場所〕を示す。(58)(59)とも上の方が普通の表現、下の方が特に起点が意識された時の表現である。

3.2.をまとめると、構文としては

(60) 〔対象〕ガ (〔場所〕カラ) ぬける。

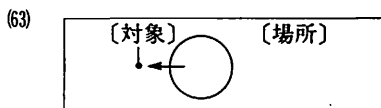
(61) 〔動作主〕ガ 〔対象〕ヲ (〔場所〕カラ) ぬく。

〔動作主〕には「人間」、〔対象〕にはある〔場所〕に固定されたものにとる。I類と異なり、〔場所〕カラは任意の要素となる。

意味としては

(62) <〔動作主〕が〔対象〕がある〔場所〕から離脱した状態になる／する>

というコトを示しており、これを図示すると(63)のようになる。



3.3. III類(「\*ぬける」——「ぬく」「ぬかす」) 追いつき  
ここでは「ぬく」「ぬかす」を用いた文のみが成立す

る例を考察する。

(64) \*英国のクルウが ぬける。

(65) 日本のクルウが 英国のクルウを ぬく。

(66) 日本のクルウが 英国のクルウを ぬかす。

III類の「ぬく」「ぬかす」はいずれもガ格とヲ格をとって

(67) NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ ぬく。

(67) NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ ぬかす。

という構文をとる。

ガ格、ヲ格には一つの座標軸上で序列・順序がつけられるものにとる。(65)(66)で挙げたようなボートレースにおける「クルウ」でもいいし、マラソンレースの選手でもいい。いずれもそれ自体が移動性を持ったものである。

ガ格がとる名詞句の意味的な格は〔動作主〕、ヲ格がとる名詞句の意味的な格は〔対象〕と考えられる。格という点から見ると、III類はII類の「ぬく」を用いた文と同じパターンをとるようである。だが、それぞれの格がとる名詞句の特性が異なる。II類に現れる〔対象〕は

(68) 太郎が 釘を ぬく。

のように「太郎」という〔動作主〕の働きかけに応じて移動するものであって、それ自体が移動性を持っているわけではない。

〔対象〕には前述したもの他、

(69) 今年の経済成長率が 去年の経済成長率を ぬく。

(70) ?今年の経済成長率が 去年の経済成長率を ぬかす。

(69)(70)のように「各年の経済成長率」や「各国の鉄の生産額」など、同じ座標軸上で序列がつけられるものなら構わない。ただし、「ぬかす」は(70)のような硬い内容を持った文は使いにくい。

3.3.をまとめると、構文としては

(71) 〔動作主〕ガ 〔対象〕ヲ ぬく。

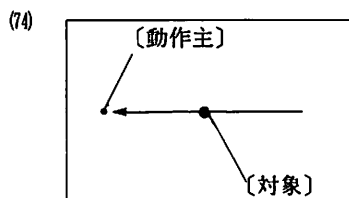
(72) 〔動作主〕ガ 〔対象〕ヲ ぬかす。

〔動作主〕〔対象〕共、一つの座標軸上で順序・序列のつけられるものにとる。ただし、II類の〔対象〕はそれ自体では移動性を持たず、ある〔場所〕に固定されており、〔動作主〕の働きかけにより移動するものであるのに対し、III類の〔対象〕はそれ自体が移動性を持ち、〔動作主〕の働きかけの有無にかかわらず移動しているものである。

意味としては

(73) <〔動作主〕が順序・序列において〔対象〕を追いつき>

というコトを示す。Ⅲ類の〔対象〕とは〔動作主〕の働きかけを受けるものというよりは、むしろ、〔動作主〕の位置を示すための基準点のような役割を果たしている。これを図示すると以下ようになる。



3.4. Ⅳ類(「ぬける」——「ぬく」「ぬかす」)部分の離脱  
ここでは「ぬける」「ぬく」「ぬかす」を用いた文がすべて正しい文として成立して、自他の対応をなす例を考察する。

(75) 大事な部分が ぬける。

(76) 太郎が 大事な部分を ぬく。

(77) 太郎が 大事な部分を ぬかす。

Ⅳ類の「ぬける」「ぬく」「ぬかす」はそれぞれ

(78) NP<sub>2</sub>ガ (NP<sub>3</sub>カラ) ぬける。

(79) NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ (NP<sub>3</sub>カラ) ぬく。

(80) NP<sub>1</sub>ガ NP<sub>2</sub>ヲ (NP<sub>3</sub>カラ) ぬかす。

という構文をとる。

「ぬく」「ぬかす」のガ格には「人間」をとる。この名詞句の意味的な格は〔動作主〕である。

一方、「ぬける」のガ格、「ぬく」「ぬかす」のヲ格には「説明、名簿の名前、朝食」など、ある順序・序列を持ったものの「部分」となるものをとる。この名詞句の意味的な格は〔対象〕である。

〔対象〕が所属する「全体」は〔場所〕カラを用いて文中に示すこともできる。

(81) 大事な部分が 辞書から ぬける。

(82) 太郎が 大事な部分を 辞書から ぬく。

(83) 太郎が 大事な部分を 辞書から ぬかす。

ここで(75)~(77)が示すコトについて考えてみたい。

(75) 大事な部分が ぬける。

(76) 太郎が 大事な部分を ぬく。

(77) 太郎が 大事な部分を ぬかす。

のように「ぬける」「ぬく」「ぬかす」を用いた文がすべて成立する。

ところが、原稿を書いている時、ある〔場所〕に読点を入れようと思いつきながら、入れないまま書き進めていった場合には

(84) 原稿を書いている時に 読点が ぬける。

(85) 原稿を書いている時に 太郎が 読点を ぬ

く。

(86) 原稿を書いている時に 太郎が 読点を ぬかす。

のように「ぬく」は使いにくい。(84)(85)はいずれも〔対象〕が存在するはずであった〔場所〕に存在していないというコトを示しており、それが意図的に行われたか、偶発的であったかは問題でない。

一方、すでに完成した原稿の中の余分な読点を取り出す場合には

(87) 余分な読点が 原稿の中から ぬける。

(88) 太郎が 余分な読点を 原稿の中から ぬく。

(89) \*太郎が 余分な読点を 原稿の中から ぬかす。

のように「ぬかす」を用いた文は成立しない。

このように〔対象〕が所属する〔場所〕がこれから完成するか、すでに完成してしまっているかによって、文が成立したりしなかったりする。だが、〔対象〕と〔場所〕との関係を見れば、(84)~(86)はいずれも

(90) <ある〔場所〕から〔対象〕が離脱した状態>を示しており、こうしたレベルにおいて(84)~(86)は一つのコトに属すると言えよう。

ただし、引用する場合には

(91) \*傍証を得るために 関係ある部分が 次郎の論文から ぬける。

(92) 太郎が 傍証を得るために 関係ある部分を 次郎の論文から ぬく。

(93) \*太郎が 傍証を得るために 関係ある部分を 次郎の論文から ぬかす。

のように「ぬく」を用いた文しか成立しない。それは「書きぬく」のような〈引用〉を示す複合動詞の要素として「ぬく」が使われていることとも関係があるのかもしれない。ただ、いずれにせよ〈対象〉と〈場所〉との関係はⅣ類のものとは異なっており、しかも今までみてきたいずれの類とも違って、カラ格に示されるものとヲ格に示されるものの関係には、変化が生じない。そこで、本稿では一往、これを考察からはずすことにする。

3.4.をまとめると、構文としては

(94) 〔対象〕ガ (〔場所〕カラ) ぬける。

(95) 〔動作主〕ガ 〔対象〕ヲ (〔場所〕カラ) ぬく。

(96) 〔動作主〕ガ 〔対象〕ヲ (〔場所〕カラ) ぬかす。

〔動作主〕には「人間」、〔対象〕には順序・序列を持ったものの「部分」とる。

という場合と

(i) Initial state: A linked list with nodes 68, 69, 70, 71, 72. A new node with value 70 is being inserted. An arrow points from the new node to the next node (71).

(ii) Resulting state: The new node (70) is now part of the sequence, and the original node (70) is now the next node (71).

まず、2.3.で考察してきたことをまとめておく。

— 80 —

が向けられている」という特徴が指摘されている。ここで挙げられた特徴のうち、限界が想定できることが一番重要であると思われる。

〈注4〉 特殊な例として酒に関するものがある。

(i)~(iii)はII類と同じパターンをとる。

(i) ワインの栓が ぬける。

(ii) 太郎が ワインの栓を ぬく。

(iii) \*太郎が ワインの栓を ぬかす。

II類と異なるのは次のような例である。

(iv) \*ワインが ぬける。

(v) 太郎が ワインを ぬく。

(vi) \*太郎が ワインを ぬかす。

このようなパターンをとるものは「ワイン」の他に「たる酒、ビール」などが挙げられる。「ビールの栓」は〔対象〕となる他の名詞句が示すものの形態と違うのはもちろんのこと、「たる酒」や「ワインの栓」とも異なっているが、それでも非文とならないのは、同じ酒であるということで他のものからの類推によって同じパターンで使われるようになったものと考えられる。

〈注5〉 III類に用いられる「ぬく」「ぬかす」は基本的には同じコトを示していると考えられる。だが、

(66) 日本のクルウが 英国のクルウを ぬかす。

を非文だと判定する人もいて、「ぬかす」の判定にはゆれがある。しかし、大部分の人はこれを正しいとしているので、本稿での判定はそれに従った。

どうしてこのような判定のゆれが起こるかというと、一つには「ぬかす」が話しことばとしてはともかく、書きことばとしてはほとんど使われないことが挙げられる。又、「ぬかす」は「ぬく」の幼児語と考えられていることもその理由となるだろう。岩淵・村石編昭和51『用例集 幼児の用語』に

(67) K子に「抜かす」という用例が1例あり、追い越すという意味である。〈どの汽車に乗るかと話している。〉第1号、1号に乗る。「イチゴウナンカマケナイヨーダ ロクゴウノ ホウガ ハヤイモン、アノ ヌカシチャウモン」

ちなみに、同書によると、水子は昭和36年10月14日、東京で生まれ、3歳半から箱根に住んでいる女の子である。

(70)のように硬い内容を持った文では「ぬかす」が使いにくくなるのもこうしたことが原因になっているように思う。

## 参考文献

- 岩淵悦太郎・村石昭三編1976『用例集 幼児の用語』日本放送協会。  
奥津敬一郎1967「自動化・他動化および両極化転形——自・他動詞の対応」『国語学』70  
奥津敬一郎1980「動詞文型の比較」國廣哲彌編『日英語比較講座2・文法』  
國廣哲彌編1982『ことばの意味3 辞書に書いていないこと』平凡社  
柴田武編1976『ことばの意味 辞書に書いていないこと』平凡社  
柴田武編1979『ことばの意味2 辞書に書いていないこと』平凡社  
寺村秀夫1982『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版  
三上章1953『現代語法序説』刀江書院（復刊くろしお出版1972）

〔付記〕本稿は、東京都立大学中本ゼミ、及び、MB Kでの発表を契機に、その後、書き加えていったものであり、出席者の方々には有益な御意見をいただきました。ここに記して、感謝いたします。